神探求の場の開示

――アウグスティヌスの照明説再考――

片柳栄一

魂の内を照す光――それはアウグスティヌスにとって「すべての人を照すまことの光」（ヨハネ一・九）であったが――この内なる光の照明に突き動かされ、この光を探求し続けたのが、アウグスティヌスの生涯の歩みであった。この光は、太陽の光と異り、人間の内を照す光、しかも特定の人間のみでなく、全ての人間を照す光であり、人間存在に固有に射し込んでくる光である。アウグスティヌスはこの光の照明を、人間存在に固有な〝神共に在す〟事態として理解している。(1) 人間はこの光に触れられているが故に神を求めるのであり、神に身を向けかえうるのである。光の照明が神探求の場を開示し、探求を促すものであるという理解から、長年議論されてきたアウグスティヌスの照明説を再考してみたい。

(一) 神探求の場の発見

―新プラトン主義との出会い―

アウグスティヌスの「回心」をめぐる長年の論争の核心は、ミラノにおける彼の新プラトン主義との出会いをどのように評価し、解釈するかにある。クルセルの研究[2]以来、ミラノにおいてキリスト教と新プラトン主義を綜合的に把えようとする人々のサークルがすでに存し、アウグスティヌスもそうした試みに促されつつ、自らの歩みを深めていったものであることが認められている。アウグスティヌスは前人未踏の領域に踏み込んでいったのではなく、多くの仲間との共通の問題意識の中で、しかもきわめて孤独な思索のうちで、新プラトン主義との出会いを遂行していったのである。そしてこの出会いの中心にあるのは、神がそこで探求され、見出されねばならない場を、アウグスティヌスが見出したことであるというのが筆者の見解である。このことを見るために我々は「告白」第七巻の記述から出発しよう。この第七巻の前半では、新プラトン主義と出会うまでに彼が何を見極め、何を残された問題として苦悶していたかについて叙述されている。彼はマニ教が語るような、悪に攻撃され、傷つくような神の観念からようやく脱しうるにまで至っていた。そして悪の問題の故にマニ教のように不変の神を可変的なものと考えるべきではないこともようやく明らかとなり、安んじて悪の原因について探求しうるようになったという。しかし彼は自らの肉にとらわれた思いの故に、神を物体的なものとして以外に考えることはできず、従って悪をも一つの物体的なもの、物体的力としてしか考えられず、これが善き神の創られた善き被造物の中に何故入ってきたのかと自ら問うて答ええなかったのである。そして彼は沈黙の問のうちで大きな叫びをあげていた。こうした中で、彼は新プラトン主義の著作を読んだ

のである。彼はこの著作に導かれた宗教的経験を次のように叙述している。「そこからさらに、身体の感覚から取られたものを判断するのに関わる推理能力へと進んでゆきました。この能力も私のうちで可変的であることを知り、知性的認識へと自らを高め、思考を習慣から引き離し、対立する想念の群から自らを退かせました。こうして、いかなる疑いもなしに「不変的なものは可変的なものより優れたものとすべきである」と叫ぶ時、どのような光がそそがれているかを見出しました。そこから不変なるものそのものを知ったのです。――何故なら何らかの仕方で知ったのでないなら、決して不変なるものは可変的なものよりも優ると確言することはなかったでしょうから。――そして、おのくまなざしがまたたく一瞬の間、「存在するもの」に到達しました。[3]」この箇所は、アウグスティヌスの照明説の locus classicus の一つであり、彼の照明説一般の性格をよく示す箇所であると同時に、アウグスティヌスが新プラトン主義から何を学んだのかを明解に語っており、新プラトン主義との出会いに関しても示唆するところの大きな箇所でもある。アウグスティヌスの照明説が、概念の形成であるというより、判断に関わることを明らかにしたのはジルソンの功績であるが、[4]この箇所は、そのことをよく示している。判断的推理能力も可変的であることを知り、それをも越えて知性認識に至り、感覚より身を遠ざけて、不可変的なるものは可変的なものに優ると明瞭に判断する時に、光が注がれているというのである。告白第七巻には永遠的真理を垣間見ようとする魂の上昇の試みが三度記されており、今引用した箇所は第二のものであるが、最初の記述では次のようである。（筆者は時間的に三度なされたというより、一度の宗教的経験を、視点をかえて三度記述したものと考える。）「私は内に入り、いかなるものであれ私の魂の眼によって、同じ私の魂の眼の上に、つまり私の精神の上に、不変の光を見ました。[5]」ここでは、不変の光が、自らの精神を越えているという点に強調が置かれている。第二の箇所では、そうした超越関係が、判断という行為において認

識されていることが語られている。そして興味深いのは、このように判断をなさしめる根拠、判断の尺度を求めていく中で、神的な光、その超越性を認識するということを、アウグスティヌスは、パウロのロマ書一章二〇節と結びつけていることである。先の第二の箇所の直前で、この結びつきを次のように述べている。「そして私は「あなたの不可視の永遠の力と神性とは、世がつくられた時より、つくられたものを通して理解され、洞察される」ということを確信しました。というのも天上のものであれ、地上のものであれ、物体の美しさを評価するのは何にもとづくのかと尋ね、また「これはこのようにあるべきであり、あれはそうあってはならない」と可変的なものに関して私が正しく判断し、語る時、私に何が現前しているのかと尋ね、つまりこのように判断する時、私は何にもとづいて判断するのかと尋ねて、可変的な私の精神の上に、真理の、不変で真なる永遠性を見出したのです。(6)」 つまりアウグスティヌスの理解では、創られたものを通して永遠の神性を洞察するというパウロの言葉は、可変的なものを判断しつつ、その判断の根拠、尺度へとさかのぼってゆき、その根拠を見、そこに神性を見出すこととして解されているのである。そしてこの解釈は「告白」だけのものではない。三九〇年に書かれた「真の宗教について」においてもこの結びつきが認められる。「我々がそれに基いて判断するものとは何か、を洞察するよう、我々が判断する事物に促され、また芸術の作品から芸術の理法へと身を向きかえて、我々はかの形相を精神によって観照するようになる。この形相と比較するなら、形相のおかげで美しい事物も、醜いものにすぎない。『神の不可視の永遠の力と神性は、世のつくられた時より、つくられたものを通して、理解され、洞察される。(7)』」 ここでも可変的的事物と判断しつつ、これらの事物に促されて、判断の根拠へ還ってゆくことが、ロマ書一章二〇節と結びつけられている。判断すること、そしてその判断の根拠、尺度へ還るという仕方で、神的なものを探求し、垣間見るというのが、アウグスティヌスがすすめる神探

求の方法である。しかも判断の根拠へさかのぼるという精神の上昇が、つくられたものを通して不可視の神性を洞察するという聖書のパウロの言葉と同じことを意味しているとアウグスティヌスは考えるのである。

この判断による真理の内観の考えは、すでにカッシキアクムの初期著作のうちに見出される。ソリロキアの第二巻でアウグスティヌスは魂の不死について理性的確証を得ようと奮闘する。魂の不死は、死の恐怖におびえる全ての人間が共通に願う望みであり、哲学史上においてもプラトンの「パイドン」以来、繰り返しその証明が試みられてきたものであるが、アウグスティヌスがカッシキアクムで執拗にこの試みをなし、未完の「魂の不死性について」まで書いたのは単に死の恐れの克服の故だけではないように思われる。彼はソリロキアの考察のはじめに、有名な「神と魂を知ることを欲する。それ以上には他にないのか。まったくそれ以外にない。」[8]との言葉を述べているが、アウグスティヌスにとって魂の不死を求めるというのは、存在の位階における魂の特別の位置を定めるということであり、魂の本性を知ることを通して、魂の上なる神を探求しようとするのである。魂を越えてゆくということがそのまま、神を探求することになり、魂の場は、神探求の場となる可能性を秘めているのである。ソリロキアにおける魂の不死性の証明の核心は、魂のうちに、魂と不可分離的な関係にある不滅の真理が存するということである。魂の内なる真理の存在を例示する核心的な部分で、判断の根拠という考えが出てくる。「こうして思念は様々の大きさの正方形を思い描き、いわば眼前にもたらす。しかし真なるものを見ようと欲する内的精神はむしろ、それら全てが正方形であるとそれに基いて判断するものへと、もし出来るなら身を向けかえる。」[9] ここでは感覚やそれにもとづく想像などによって得られる認識と、経験によらないアプリオリな認識が区別され、後者がしかも判断の根拠となるものとして示されている。「告白」や「真の宗教について」の中で、そこで不変的なものが探求されるべきであり、パウロの言葉で言

えば不可視の神性がそこで探求されるべき場として示された判断の根拠となるものへの考究は、すでに初期のアウグスティヌスの思想の中核的なものであったことが知られるのである。

判断の根拠となるものは、可変的な魂の内にあって不変なものとして知られる。だからこそ魂の一部としてではなく、魂と不可分離的ながら、魂、あるいは精神を越えたものとして認識され、この超越性が神的なものの徴しなのである。この判断の根拠の超越性については、「自由意志論」の二巻において詳述されている。「『これはそうあるべきであるよりも白くない』とか、『正方形でない』とか類似の多くのことを言う時、我々は確かに物体について判断している。これに対し、魂について『あるべきであるよりも適わしくない』とか、『優しくない』とか『激しさが足りない』とか、我々の道徳的性向についての理法が示す如くに語る時も、我々は魂について判断しているのである。そして我々は、これらを真理のかの内的な規則に従って判断するのであり、我々はこの規則を共通に認識するのである。しかしこの規則そのものについては、我々はいかなる仕方においても判断することはない。というのも人が、『永遠的なものは時間的なものより力がある』とか、『七と三では十である』という時、誰もそうあるべきだとは言わず、唯そのようであるのを認識するのであり、吟味者として正すのではなく、発見者として唯喜ぶのである。[10]」ここでは判断の根拠となるものの超越性が、この根拠そのものについては如何なる人も判断することはできず、唯そのようであると発見し、認識するだけであるという事実のうちで明瞭に示されている。このような判断の絶対依存性が、根拠の超越性、神性を証しているのである。このような判断の尺度、根拠の超越性を洞察したということが、アウグスティヌスの神探求の新たな開始であり、このような探求の場を見出したということが、彼の新プラトン主義との出会いの意味であると思われる。この超越性はなお不可視の神性をいわば手探りで求めてゆく探求の第一歩であり、神性を

その明らかな様で見ることではない。[11] 彼は自らが絶対にそれに依存し、服従しなければならない超越的なものの広大な領域の入口に立っているに過ぎず、「告白」の表現を借りれば、この神性の輝やきに耐ええず、うちしりぞけられ、日常性へつきもどされざるをえなかったのである。しかしこの探求の場はある確かな場であり、その手探りは確かな感触をもっているのである。しかもアウグスティヌスは、この新プラトン主義的な神探求の方法が、聖書でパウロが教えているところでもあると確信しているのである。

(二) アウグスティヌスの照明説の展開

我々は、ミラノでのアウグスティヌスの新プラトン主義との出会いの核心をなすと思われる発見、つまり不変の真理が精神の内に現臨しているという事実の発見を「告白」、「真の宗教について」、「ソリロキア」とさかのぼり跡づけた。この事態を「告白」は、不変の光の照明として語っているが、他の箇所では直接光と関係づけてはいない。すると「告白」が光の照明として語っているのは、創作的脚色なのであろうか。筆者はそうは考えない。ミラノではなかったことを、後に創作して挿入したというのではなく、真理の精神への現臨という同じ事態を、「告白」は「ソリロキア」とは異った、より反省と敬虔を深めたまなざしで見つめ、表現していると思われる。そしてこのことは、アウグスティヌスにおいて「照明説」がどのように展開されていったかという問題と深く関っている。

アウグスティヌスはカッシキアクムにおいてすでに〝照明〟という考えに親しんでいたと思われる。神は叡知的な光と呼びかけられており、[12] 学的認識は「他なるものによって、いわば太陽によっての如く照明されるのでなければ、理解されないと信じられるべきである。[13]」とまで言われている。至福を与える至高の善は精神の光とされている。「各

々は、自らの健かさと堅固さに応じてかの特別の、最も真実な善を把握している。これは、精神の言い表しがたき、理解しがたき或る光である。[14]」そしてこの強き光を見るに耐えうるように成るためには、訓練が必要であるとして、まずそれ自身では光らず、他の光によって見えるようにされる事物、例えば衣服や壁から始めて、より自らによって光るものへと上昇していく方法も語られる。[15] この訓練法はプラトン以来語られてきたものであり、[16] アウグスティヌスは、ミラノの新プラトン主義的キリスト者のグループでの交わりや、新プラトン主義の書物を読む中で、精神的光の教説を自らのうちに摂取していったものと思われる。[17] その意味でアウグスティヌスは始めから、神的光の照明という観念になじんでいたのである。アウグスティヌスにとって問題であったのは、古来より宗教と哲学において広く用いられてきた〝照明〟という観念を用いて、自ら見出した、[18] 真理の精神への現臨を如何に理解し、表現するかであった。或る意味でカッシキアクムにおいてすでに、アウグスティヌスの照明説の道具はそろっていたと言える。あとはこれを用いて作業することであるが、そこには難しい問題が横たわっていた。アウグスティヌスが明らかにしなければならないのは、真理が精神のうちに現臨するということであるが、この現臨とは如何なる在り方なのか、その結びつきは如何なるものであるのか、その内在と超越は如何に説明されるのか、アウグスティヌスはこの問題の解明をめぐって、終生倦むことなく思索を続けていったと言える。それが彼の照明説の展開の跡であり、この解明の苦闘は、彼の神探求の苦闘そのものであったと言えよう。

我々はもう一度「ソリロキア」の二巻二〇・三五にもどり、そこでの問題から始めよう。アウグスティヌスがここで示したのは正方形の形をした外的事物、或いはその想像物の尺度、根拠となるものが我々の魂のうちにあるということであった。そしてこの尺度、根拠であるものは、まさしく不滅なるものであり、不滅なるものが魂のうちにある

という驚くべき事実にアウグスティヌスは注目する。「ソリロキア」第二巻の主要なテーマは魂の不死についてであるが、そうしたコンテキストにおいて先の箇所は、不滅なるものの魂のうちへの内在を示したのである。しかし単に、不滅なるものが魂のうちにあることが示されたとしても、それが容易に魂から分離しうるものであるなら、魂は滅びるものでしかない。魂も不死であるためには、不滅なるものと魂の結びつきが不可分離的であることが示されねばならない。魂の不死というテーマに促されながら始められた不滅の真理と魂の不可分離の結びつきについての考察は、魂の不死を証明しようとする試みが放棄された後も続けられる。先にも述べたようにこの結びつきの問題は、魂の本性に関わる問題であり、さらに人間がそこで神を探求し、そこで神に出会う場の問題だからである。その故に終生のたゆまぬ解明の努力が続けられるのであるが、その解明の苦闘の中で照明説が展開されてゆく。問題は、この結びつきをどのように説明し、表現してゆくかである。

アウグスティヌスの説明の出発点となるのは、プラトンの想起説である。プラトンの「メノン」において、何ら幾何学の教育を受けたことのない奴隷の少年が、適当な問に導かれて幾何学の定理を答えることができる様が述べられている。[19] この知識は外から学び、教えられたのではない。少年はまったくそうした教育を受けていないからである。そうではなくこの少年は生れつきこの知を持っていたのであり、必要なのは、忘却している知を想起することなのである。アウグスティヌスが、判断の尺度について「ソリロキア」の中で述べた先ほどの箇所の直前で、次のように想起を問題にする時、明らかにアウグスティヌスは、プラトンの想起説の影響の下にある。「(理性)或る人を(想い出そうとして)問題にする場合、その人をどこで知ったのか探り出そうともする。そして人がそれを想い起す時、突然すべてのことが記憶に、まるで光のようにそそがれ、想い出すためにそれ以上何も骨折る必要がなくなるのである。

それともあなたはこうした経験をしたことがありませんか、あるいはわかりにくかったですか。（アウグスティヌス）これ以上に明瞭なことがありましょうか。これ以上にしばしば経験することは他にありません。（理性）自由学芸によってよく教育された人々も同様なのです。確かに疑いもなく自分のうちに忘却でおおってしまっているものを、学ぶことによって掘り起し、何らかの仕方で掘り出すのです。[20]」 自由学芸の教育を受けた者が自らのうちに見出す知は、外から偶然に与えられたものではなく、すでに知っているが忘れていたものを、突然ひらめきの如く想い出す想起の現象と同じようにして得られるものであることを語り、この知と魂の不可分離的な結びつきを明らかにしようとするのである。こうした想起説に基く説明は、カッシキアクム対話篇だけでなく、「魂の大いさについて[21]」や三八九年に書かれたと思われる第七書簡のうちにも見られる。この想起説による説明は、[22]「修正録」においてアウグスティヌス自身が、「ソリロキア」の先の箇所を引用して批判し拒否しているため、[23]多くの研究者は、[24]アウグスティヌスの思想の展開は、想起説を放棄して照明説を採用していったことであると解しているが、そう簡単な展開ではないように思える。というのも後に見るようにアウグスティヌスの照明説は、最後まで想起の考えと表裏をなしているからである。

アウグスティヌスがプラトンの想起説を批判するのはそれが魂の先在説と結びついているからである。アウグスティヌスが何時の時点で魂の先在説を放棄したかについては議論の余地のあるところであるが、[25]この問題をはらんだ先在説に依存するような想起の考えを修正していこうとアウグスティヌスが考えたであろうことは容易に推測される。判断の尺度となるような真なる認識を人は、偶然に経験を通してえるのではなく、本来内にもっているのであり、忘却によっておおわれているものを唯想起すればよいという形で魂と真なる知の不可分離の結びつきを主張するのが想起説であるが、何故そのような知を持っているかを、魂がこの世に生れでる以前に存し、そこですでに知を得ていた

として説明するのが魂の先在説である。[26] このような過去へさかのぼる仮説によってでなく、真理の魂への超越的内在を説明しようとするのが、アウグスティヌスの真理の光の現在的照明の考えである。

アウグスティヌスは「魂の不死について」(三八七)の中で当然のことながら、真理と魂の結びつきについて言及している。「事態がどのようであれ、魂が真理を自分自身で観照しうるのは、真理との何らかの結びつき(conjunctio)によって以外ではありえない。つまり我々が観照するもの、あるいは思惟によって把えるものの全ては、感覚によってか、あるいは知性によって把えるのである。しかし感覚によって把えるものは、我々の外にあると感覚され、場所によって保持されるのであり、そこから確実に知覚されないこともありうることが承認される。しかし知解されるものは、知解する魂以外のところにあるとは解されない。というのも同時に、場所のうちに保持されないことも知解されるのである。[27]」 ここでは結びつきが外的なものでなく魂そのもののうちなる結びつきであることが示されている。しかしそれ以上の解明も、結びつきの根拠も示されてはいない。

魂の内なる照明が断片的でなく明瞭な組織的な形で述べられるのは三八九年の「教師論」においてである。この中で彼は言葉は何事も教えることはできず、言葉の指示する事物そのものが我々を教えることを明らかにしているが、感覚的なものでなく、知解するものについては次のように述べている。「ところで我々が精神によって、つまり知性、あるいは悟性によって洞察するものについては、かの真理の内的な光のうちで現前するものを観、それを語るのである。この光によって、内的人間と言われるもの自身が照明され、それを享受するのである。[28]」「教師論」の主題は、まさしくプラトンの「メノン」と同じである。我々は言葉によらず、感覚にもよらない認識を、すでに我々のうちに持っている。そのことが確認される。しかしその説明を、プラトンのように想起と魂の先在によってでなく、魂のうち

なる現在的の光の照明によってなそうとアウグスティヌスは明らかに意図している。キリスト教的プラトニストの意識的な修正の試みである。この試みによって、何故我々は自らのうちに、感覚の偶然的出会いによるのでない不変に真なるものを持っているのかについて、プラトンの内在的説明とは異なる、いわば超越的内在の説明を得たことになる。しかしこの真理の光と魂の結びつきについては、この「教師論」においては直接ふれられていない。真理の光の照明の考えは、この結びつきに関する魂の自力性を打破する力を内に秘めている。或る意味で結びつきの不可分離性は危うくされている。光を照らされるものには、この照明の永続性を自らの本性に求めることはできないからである。もし永続性があるとしたら、それはもっぱら照す光にその因があることになる。アウグスティヌスが照明説へ向けて、問題の解決を整備していく一つの動機は、こうした光への絶対依存性をこの結びつきの問題に関しても明瞭にすることが彼の求める宗教的敬虔に適わしいと考えたということであろう。すると課題は、真理の超越性と魂のそれへの絶対依存性を保持しつつ、この結びつきの非偶然性、不可分離性を、明らかにしていくこととなる。[29]

アウグスティヌスの哲学的思索は、「真の宗教について」と「自由意志論」において一つの頂点を形成する。照明の考えについても、頻繁に、様々な箇所で表明されている。「真の宗教について」では概して神の側からの照明の超越性が強調されているが、[30] 結びつきの緊密さを表わそうと努めた箇所もある。「私はプラトンが次のように答えるだろうと思う、つまり大衆を少くとも信仰へと説得できるのは、神の力と知恵とが、事物の本性から例外的に取り出し、人間的教師によってではなく、生れた時からの親密な照明 (intima illuminatio) によって照らし……た人だけであると。[31]」 ここでは「教師論」と同じ主題が、簡潔に、しかも結びつきが生来的できわめて親密なものであることを加えて述べられている。「もし私が言っていることがわからないか、あるいは真なるものがあることを疑っているなら、

少くとも自分がこれらについて疑っていることは疑いないことを知りなさい。そして自分が疑っていることが確実なら、どこからこの確実さが来るか、探ねなさい。そこであなたに出会うのは、この太陽の光ではない。そうではなく、この世に来る全ての人間を照す真なる光である。[32]」ここではヨハネ一・九を引用しながら、この真なる光の照明が個別偶然的なことでなく、人間が人間である限りにおいて与りうる普遍的なものであることが述べられている。

次にあげる「自由意志論」第三巻五章十三節の箇所は、直接照明には言及していないが、「ソリロキア」以来の判断の根拠の問題をめぐっての発言である。『ああではなく、こうなる方が良いのに』と人が語る時、人間の魂は、それが依存する神的な理拠と本性的に(naturaliter)結びついている。そして真なることを語り、語ることを透見するなら、魂が結びついている理拠において透見しているのである。」「魂の不死について」では「何らかの結びつき」(aliqua conjunctio)と言われていたものが、ここでは本性的に結びついている(naturaliter connexa)と言われている。照明説が明瞭に表明された後に書かれた本書(三九五年までに完成)においてこの結びつきが本性的であると一歩踏み込んで表明されているのは注目に価する。彼が光の照明として説明する事態が、魂の本性そのものに属するのであり、魂が魂であるという限りにおいて持つ本性として、まさに照明が考えられようとしていることがうかがわれる。

しかし今述べたことが明瞭に述べられるのは、四一九年に完成した「三位一体論」第十二巻においてである。ここで彼は、プラトンの魂の先在説を明確に批判し、これに代えて照明説をはっきりうち出す。プラトンへの批判は、この考えでゆくと前の世では全ての人々が幾何学者だったようだと軽くいなしたものであり、つづいて自らの照明説を説明する。「むしろ次のように信じられるべきである、つまり知的精神の本性は、神のつくられた自然的秩序によって、叡知的事物に、服属するようにつくられている。こうしてその類独自の非物体的な或る光のうちで、この精神は

叡知的事物を観るのである。それは丁度、肉の眼が、この物体的な光のうちに置かれた事物を見る如くであり、この光を見うるように、またそれに適わしいようにこの眼はつくられたのである。[33]」ここでは肉の眼が太陽の光に適わしいようにつくられてある如く、自然の秩序によって、精神は叡知的事物に服属（subjunctus）依存するようにつくられており、この服属関係が照明として説明されている。ここではかつてのような conjunctus、connexa という同質的な結びつきを暗示する言葉ではなく、subjunctus という優劣的な結びつきを示す言葉が使われており、アウグスティヌスの神中心主義の深まりが感じられるが、なおその非偶然的、不可分離的な結びつきを示すために、自然の秩序によって、この服属関係が本性として定められ、つくられていると述べているのである。アウグスティヌスにとって魂の光は、創造にまでさかのぼるものであり、つくられた魂の本性にさしこんでいる光として把握されるに至っているのである。[34]

㈢　照明は比喩か？

アウグスティヌスが照明説を明確に打ち出していった一つのモティーフは、魂のうちにおける真理の超越を強調することであった。しかし照明という表現で、魂のうちなる判断の根拠を説明するということは、それだけに尽きない内的理由をもっている。真理と光とはきわめて密接な連関をもっており、アウグスティヌスによれば、真理を光として表現するのは、単なる比喩ではないのである。[35] そのことを、「創世記逐語註解」四巻二八・四五は、はっきりと語っている。「霊的光について、また霊的天使的被造物のうちに創られた日について、また神の言葉のうちで持つ観照について……私が語ったことを、日と夕と朝とを理解するための象徴的比喩的解釈と考えないで欲しい。確かにかの

光は、日常経験するこの世の光とは異っているのであるが、しかしこの世の光は本来的意味で語られているのに対して、創造の七日間の光は象徴的に語られているというのではない。というのも光がより良く、より確実であるところでは、日もより真実なのであるから。……キリストが光と言われるのも、岩と言われるのとは異るのである。前者は本来的に(proprie)に言われ、後者は象徴的に言われているのである。」この箇所で主に問題となっているのは、特別な日としての創造の七日間の第一日に語られている光についてであるが、キリストの光についても述べられているように、ここで問題になっているのは、我々がこれまで問題にしてきた真理の光、我々の魂のうちにそそがれる光についてである。そしてアウグスティヌスが言うのは、その光は決して単なる比喩ではないというのである。キリストが岩であるという表現は比喩であるが、キリストが光であるというのは本来的意味において言われているという。もちろんキリストが光であるという場合の光が、太陽の光を指しているのではない。「というのも光がより良く、より確実であるところでは、日もより真実なのであるから」と言われているように、アウグスティヌスの理解では太陽の光よりもキリストの光、神の光の方がより良く、より真実なのであり、被造物としての太陽の光は、創造者としての神の光の模像なのである。だから太陽の光は本来的意味で語られ、神の光は象徴的意味で語られるというのは、本末顚倒なのである。すると太陽の光がその似像でしかない真理の光の光たるゆえん、その光性とは何であるのかが問われることになる。この問に、先の「創世記逐語註解」の箇所は明瞭な答を提供してはくれない。この問への答を示唆するアウグスティヌスの言葉は、他のところに求められねばならない。二つの箇所が挙げられる。同時期(三九三年)に書かれた「未完の創世記逐語註解」五章と「山上の垂訓」二章においてであり、同様の考えが示されていると言える。「それによって各々の事物が明らかである(manifesta est)ものを、人が光と呼んで正しいなら、ここで光と適し

く語ることが認められよう。我々が『これが調和のとれた響きであることは明らかであり……これが冷いことは明らかだ』と語り、このような身体的感覚によって得られるものに関して同様に語る時、それによってこれらが明らかであるこの光は確かに魂の内（intus）にある。このように感じられるものは身体を通してもたらされるのではあるが。[36]」

「我々が為すことを、我々は善き魂をもって為すということは、我々にとって明らかなことであるのだから、これは我々のうちなる光である。というのも、全て明らかなことは光なのであるから。[37]」アウグスティヌスによれば、事物が明らかである時、そこに光があるのである。そして〝明らかである〟ということの様々に多様な意味合いがあるだけ、多様な光があることになる。太陽の光は、感覚的事物を我々の肉眼に明らかにするが故に光なのである。明らかさのあるところに光があるという原理から、アウグスティヌスは、感覚をも一つの光と正当に呼びうるとする。「太陽や月のように肉眼で見られる光がある。これとは異った光であるが、身体を通して魂の判断へともたらされるもの、つまり白いとか黒いとか、良い響きだとか、かすれているとかいったことを感じ、識別しうる生も、光なのである。[37]」確かに感覚も、この意味で光なのであるが、感覚がもたらす明らかさはしかし、なお曖昧さと誤りの影を伴っている。この光の輝きは弱く、かぼそいものなのである。アウグスティヌスは一層明るい光を知っている。「自らが疑っていることを理解しているものは、真なるものを理解しているのである。そして理解しているこのものについて確実なのである。だから真なるものについて確実なのである。それ故、真理があるかと疑う者は全て、自らのうちに真なるものを保持しており、これについては疑いないのである。またいかなる真なるものも、真理によってでなければ、真ではない。だからいかにもせよ、疑うことのできた者は、真理について疑う必要はないのである。このことが見てとられたところには光がある。それは空間や時間のいかなる幅ももたず、そのように幅をもったものの想像も伴ってい

ないのである。[38]」アウグスティヌスは、ここで疑う者の疑いそのものの疑いなさについてのべ、その確実さを、光としている。ここにおける明らかさは、疑いと曖昧さの影を伴っていない。自知の明るみが、デカルトのコギトにも似て明確に示されている。アウグスティヌスは様々の箇所で、懐疑を克服する自己の知について述べているが、この箇所は最も適切明瞭なものである。そしてこの自知の確実さが、光と言われているのも注目すべきである。我々はすでに先の二つのテキストから、明らかさのあるところに光があるという、アウグスティヌスの基本命題を知っている。それ故、この自知の明るみが光として語られているとしても、いぶかしさを覚えることはない。しかしこの箇所は、アウグスティヌスの照明説を語るテキストの中で特異なものである。他のほとんどの箇所で語られる〝魂の内なる光〟は、永遠不変の真理を開示するものである。これまでの表現を用いれば、判断の根拠、尺度としての不変の真理である。しかしここで問題となっているのは、不変なるものでなく、可変性を秘めた魂の自知である。その意味で光と言われながら、二つは区別されるべきであろう。永遠の真理が光と言われるのとは、異った意味で、自知も、その独自の〝明るみ〟の故に光とアウグスティヌスにおいて言われていると思われる。そしてアウグスティヌスは、様々の事物について判断しうるということから、その判断の根拠にさかのぼるという形で、永遠なるもの、神を求めていったように、自知の明るみの確実さから、この確実さの根拠として、真理を推論し、自らの確実性にとどまらず、この確実性が指し示すその源にさかのぼろうとしていると言えよう。感覚物の判断からその尺度へというのとは異るが、可変的被造物としての魂の自知の確実性の明るみから、永遠なる真理の明るみへさかのぼるというのも、アウグスティヌスが、新プラトン主義との出会い以来、試みてきた〝つくられたものを通して、見えざる神性を洞察する〟という神探求の在り方の一つであり、その徹底、深化である。アウグスティヌスは「三位一体論」八巻以降でこの方法を主

題的に取りあげていくのであり、「真の宗教について」のこの箇所はその先き触れと言えよう。

以上見てきたように、光の照明とはアウグスティヌスにとっては単なる比喩以上のものであり、光の明るみという表現で事柄そのものが目ざされている。明らかさのあるところに、光があり、この明らかさの段階に応じて、異る光があるのであり、物体の光、感覚(眼そのものが放つ光)、魂の自知、永遠なる真理が、その明るさの質を異にしながら、各々の明るみをもたらし、各々光と呼ばれうるのである。

㈣ 照明の内在と超越

アウグスティヌスの照明説の核にあるものは、その由来からして、魂と不可分離的な結びつきのうちにある不変的なものの存在である。それは魂のうちにありながら、そして魂と不可分離の結びつきをもちながらなお、魂を越えたものである。そして魂はこの結びつきを持つが故に、存在の位階のうちで物体的なものとは異なる位置を与えられ、他のものにまさって神の間近にあるものとされているとアウグスティヌスは考えるのである。この不変の真理はその〝明らかさ〟の故に光とされ、魂のうちで認識される時、正当にも照明と言われたのである。ところでこのように真理が光と表現されることはその超越性が強調されることであり、精神の上 supra mentem にある光と表現されるのであるが、アウグスティヌスはまたこの光がどこまでも、我々のもと apud nos にあるという内在的性格をもつことを指摘するのを最後まで止めない。我々は光の照明の超越と内在との関係を、照明説が明確な形をとって表現された円熟期の大作、「三位一体論」のうちで見てみたい。

魂の自知について探求する九巻において、彼は自知について次の二つを区別する。「しかし人間精神が自己自身を

知り、自己自身を愛する時、何か不変なるものを知り愛するのではない。各々の人が、自らの精神のうちで起っていることに注目して言葉によってそれを告げるのと、人間精神を、種的類的な認識によって定義するのとは別なことである。[39]」 先にも見たように、単なる自己知は、どれほど確実であっても、永遠的な規範的な認識ではない。後者は、自己知そのものからは区別されねばならず、自己知を越えたものから、つまり恒久的な理拠より洞察されるのである。しかしそのことはどのようにして可能なのか、またどのように生ずるのであろうか。「それ故、全ての時間的なものがそれに由って創られた永遠の真理のうちに、我々がそれに従って存在している形相、それに従って我々のうちに、あるいは物体のうちに何ごとかを、真実で正しい理性によって我々が働き仕上げるその形相を、精神のまなざしによって洞察するのである。そしてそこから事物の真正な観念を胚胎し、いわば言葉として我々のもとに apud nos 所持し、言うことによって内的に産むのである。[40]」 単に経験的な自らの知でなく、永遠的な真理のうちで、形相を観ると言われている。しかしここでアウグスティヌスが考えているのは神秘的な経験としての観照ではないようである。この観られたものは、自らのうちに胚胎され、この観念が内に所持され、内的に語ることによって産み出されると言われている。アウグスティヌスによれば、記憶のうちに隠されている知 notitia を現在的思考 cogitatio によって意識の明るみにもたらすことが、内的に語ることであり、言葉を産むことなのである。内的な語りとして自らのうちにある真理を認識する時、人は新しい知を外から得、自らの外に見るのではなく、すでに自らの内にあることを見い出すのである。このことをアウグスティヌスは第十四巻で一層明らかにする。「不敬虔な人々も永遠性を思考し、人間の行動の多くを正当に批難し、正当に賞賛するのもこのことによる。これらのことを如何なる規範によって判断するのか。自分自身はそのようには生きていなくとも、各々がどのように生きるべきかをそのうちで観る規範によって以外

ではない。どこでそれを見るのか。自らの本性のうちにおいてではない。疑いもなくこれらは精神によって見られるのであるが、彼らの精神が可変的であるのは明らかであるが、こうした規範が不変であるのを見るからである。……するとそれはどこに書かれているのか。真理と呼ばれるかの光の書のうち以外ではない。そこから正しい全ての法が書き写され、正義を行う人の心に、移送によってではなく、いわば刻印されて渡されるのである。印鑑から、形象が蠟に移り、印鑑はそのまま残る如くである。しかし正義は行わないが何を為すべきであるかを見る人は、光からは離れているが、しかし光によって触れられている人である。(41)」

第九巻で胚胎された知 concepta notitia と言われたことが刻印することによって imprimendo と言われている。いずれにせよ、我々はこれを記憶のうちに覆蔵しているのであり、我々が事物を判断し、その根拠を自分のうちに見出す時、それは記憶から生れた言葉なのである。その意味で、永遠の神的光を直接見るという存在論主義 Ontologismus のアウグスティヌス解釈は正しくない。(42) 我々に刻印されたものを記憶の内より意識の内へ産み出すという仕方で照明そのものがアウグスティヌスにおいては考えられているのである。この点でアウグスティヌスの照明説に残る想起の重要さを指摘しているジョリベの主張は首肯しうるものである。(43) しかし彼はオントロギスムスを避けようとするあまり、照明の光が被造的光 lux facta であるとまで主張するのは無理な解釈である。彼はその典拠として手紙 Epistola 一四七、十七章四二節、ファウストウス論駁二〇章七節を挙げているが、そこで判断する精神が正義や真理を理解するその思考が光と言われ、またそれが被造物であると言われていることから、アウグスティヌスの照明の光は、永遠なる神性の光ではなく、被造的な光であると結論するのである。しかし先に見たように、アウグスティヌスは思考が光であるということを、そこに〝明らかさ〟がある故に言っているのであり、この光を、判断の根拠としての永

遠の真理の光と同一視する必要は必ずしもないのである。確かに照明は想起を介した間接性をもっている。しかしアウグスティヌスは人間の精神が真理の光に触れられていることを明瞭に認めているのである。そしてジョリベも認める如く、アウグスティヌスによれば、想起によって人が真理を意識にもたらす時、それは過去の想起ではなく、現在的なるものの想起なのである。いつも想起を介しての真理の言葉の産出という形はとっても、この内なる言葉において、常に人間存在の根底で触れている永遠の真理に達しているのである。いつでも触れられている永遠の光に、人間は思考 cogitatio の意識化によってまさしく触れ直すのである。

㈤ 神探求の促しとしての照明

これまでみてきたようにアウグスティヌスは、ミラノでの新プラトン主義との出会いにおいて、判断の尺度となるものが、自らのうちにあり、これは自らが感覚的経験によって外から偶然に得たものではなく、精神がその存在と共に有しているものであり、それが不変であるのに精神は可変的なものである限りにおいては、この不変的なものは、精神の上 supra mentem にあることを見出した。アウグスティヌスはこの不変なるものの精神の現臨において、神が探求されるべき場を見出したのである。[45] それはパウロの言葉、不可視の永遠の神性を、つくられたものを通して理解するという神探求の場を示されることであった。そしてアウグスティヌスは、このような神探求へと全てのものが促していると感じていたのである。彼にとって判断の対象となる全ての事物自身が、判断から判断の根拠へ還るように促す存在であった。そのような外からの促しのみならず、内よりの促しをカッシキアクムのアウグスティヌスはすでに知っていた。しかも彼はこの促しを照明と結びつけているのである。「我々に働きかけて、神を想い出すように、

神を求めるようにし、あらゆる倦怠を追い払い神を渇き求めるようにする或る種の促しが、真理の源そのものから、我々のもとに流れ出ている。かの太陽が、この輝きを我々の内なる光へとひそやかに注ぎ込むのである。[46]」 光なる神を求めるよう他の事物が促すのみならず、光そのものが、この探求を促していることをすでにアウグスティヌスはキリスト者としての出発点の時期から知っていたことがこの箇所から知られる。後の恩恵論の下地はこの時期に十分備えられていたと言えよう。そしてアウグスティヌスの恩恵論が確立された記念碑的書簡「シンプリチアーヌスへ宛てて」の中で同様の考えが、敬虔さを一層深めた形で表明されている。「神が欲する者をあわれみ、欲する者をかたくなにするということは、或る隠された、人間的尺度からは測りがたい公正さに属するということを、堅く執拗に信ずべきである。この公正さは、人間的地上的な契約においても認められることである。こうした事柄において最高の正義の或る刻印された跡を我々が保持しているのでなければ、霊的戒しめの聖なる浄き内奥へ向けて、我々の弱き意志のまなざしをあげ、憧憬することはなかったであろう。『義に飢え渇く人々は幸いである。何故なら彼らは満されるであろうから。』 この有限な生の渇いた荒地において、もし上から、言わばひとすじの正義の風のそよぎが吹き渡らなかったら、渇きをおぼえるというより、すぐにもしおれてしまったであろう。[47]」 ここでは義を求めるということ自身、上よりの促しなしには生じえないことが印象深く語られている。しかもこの促しは、我々のうちに刻印された正義の跡を介してなされるというのである。確かにここでは照明について、光について言われてはいない。しかし照明とは「明らかさ」の謂である。正義の風のそよぎ aura justitiae が同じことを意味していることは明らかである。そしてこれは、正しいと判断せしめる根拠が明らかに認められることである。アウグスティヌスは恩恵論においても同じ事柄を問題にしているのである。唯ここにおいては、判断の根拠、尺度となるものそのものが、促し招きよせる力

あるものとして強調されているのである。その意味で、アウグスティヌスの照明説と恩恵説は深い連関のうちにある。神の根底的な光の照明が、人間の神探求の原動力であることを、自らの宗教的経験をにじませて述べた次の言葉は、照明と恩恵の深い連関を強く示唆しているように思われる。「人は自らの主なる神を想い出す。……人がこれを想起するのは、アダムにおいて神を知っていたからでもなく、この身体的生の以前に何処か他の処で神を知っていたからでもなく、またこの身体に入れられるべく最初に創られた時、神を知っていたからでもない。というのもこれらの何一つとして想い出さないからである。これらのいずれであれ、忘却によってぬぐい去られてしまっている。しかし人は神を想い起し、主に還ってゆく。それは、その光から離反している時でさえも、何らかの仕方で触れられている光に還ってゆくようにである。[48]」ここでは神を想い起し、神を求め、神に還る人間の歩みそのものが、光の照明を原動力としていることが語られている。しかもこの光は、意識的には神から遠く離れている者にも触れている光であり、人間存在をその根底で照している光である。この光に触れられていることに気づき、この照明を恵みにみちた神の呼びかけと理解し、この照明の源へ還ってゆくこと、それが神に向けてつくられた人間存在に求められていることである。

註

(1) Augustinus, De trinitate, XIV. 12. 16.
(2) P. Courcelle, Recherches sur les confessions de saint Augustin, Paris 1967.
(3) Augustinus, Confessiones, VII. 17. 23.
(4) E. Gilson, Introduction à l'étude saint Augustin, Paris 1969, p. 103-130. Cf. F. Cayré, Initiation à la philosophie de saint Augustin, Paris 1947, p. 209-243.
(5) Augustinus, Confessiones, VII. 10. 16.
(6) Augustinus, Confessiones, VII. 17. 23.
(7) Augustinus, De vera religione, LII. 101. アウグスティヌスのロマ書一十八—二五の理解については G. Madec, Connaissance de Dieu et action de grâce, dans: Recherches Augustiniennes, II, Paris 1962, p. 273-309. 参照。

(8) Augustinus, Soliloquia, I. 2. 7.

(9) Augustinus, ibid., II. 20. 35.

(10) Augustinus, De libero arbitrio, II. 12. 34.

(11) アウグスティヌスの照明説をめぐる一つの論点は、この判断の尺度となるものを見ることは、神そのものを見ることなのかということであった。ノッセンでさえ、オントロギスムスのレッテルを恐れて神のイデーの直観と神の直観を技功的に区別しようとしているが、ジルソンはアウグスティヌスにおいては神のイデーは神であると明言している。Cf. E. Gilson, ibid., p. 128. J. Hessen, Augustinus Metaphysik der Erkenntnis, Berlin 1931, p. 217.

(12) Augustinus, Soliloquia, I. 1. 3. 初期アウグスティヌスにおける照明を扱った好著として清水正照「アウグスティヌス形而上学研究」(東京一九六八)参照。

(13) Augustinus, ibid., I. 8. 15.

(14) Augustinus, ibid., I. 13. 23.

(15) Augustinus, ibid., I. 13. 23.

(16) Platon, Politeia 516a–b.

(17) プロティヌスの光の形而上学については W. Beierwaltes, Plotins Metaphysik des Lichtes in: Zeitschrift für philosophische Forschung, XV (1961), S. 334–362. 参照。

(18) Cf. H. Blumenberg, Licht als Metapher der Wahrheit, 1957. 邦訳「光の形而上学、真理のメタファーとしての光」(生松敬三訳) R. Bultmann, Zur Geschichte der Lichtsymbolik in Altertum, im: R. Bultmann, Eexegetica, Tübingen 1967, S. 323–354.

(19) Platon, Meno 82b–85b.

(20) Augustinus, Soliloquia, II. 20. 34–35.

(21) Augustinus, De quantitate animae, XX. 34.

(22) Augustinus, Epistola, VII. 2.

(23) Augustinus, Retractationes, I. 4. 4.

(24) J. Hessen, ibid., S. 66ff. B. Kälin, Die Erkenntnislehre des hl. Augustinus, Sarnen 1920, S. 81. Régis Jolivet (Dieu Soleil des Esprits, Paris 1934, p. 172–173) は、正当にも想起から照明への移行という単純な考えを批判し、現在的記憶の考えを深めたところにアウグスティヌスの特徴があるとする。

(25) 通説を果敢に批判し、根底的な再吟味を試みている R. J. O'Connell の主張は注目に値するが、この説に対する評価は一個の論文をもってなされるべきが正当な教意であろう。R. J. O'Connell, St. Augustine's early Theory of Man, Cambridge 1968. R. J. O'Connell, Art and the Christian Intelligence in St. Augustine, Cambridge 1978. R. J. O'Connell, The Origin of the Soul in St. Augustine's

later works, New York 1987.

(26) Platon, Meno 81c–d, 86a.

(27) Augustinus, De immortalitate animae, VI. 10.

(28) Augustinus, De magistro, XII. 40. Cf. Ch. Boyer, L'idée de vérité, Paris 1920, p. 181–184.

(29) Cf. Jolivet, ibid., p. 173.

(30) J. Hessen, ibid., S. 89.

(31) Augustinus, De vera religione, III. 3.

(32) Augustinus, De vera religione, XXXIX. 72.

(33) Augustinus, De trinitate, XII. 15. 24.

(34) 「三位一体論」と平行して書かれたと思われる「創世記逐語註解」における光の解釈について触れねばならないのであるが、問題の重要性と複雑さの故に稿を改めて論じなければなるまい。拙稿「創造における conversio」(「中世哲学研究」二十五号一九八三年)参照。

(35) アウグスティヌスの照明説の一つの源がプラトンにあることは明瞭であるが、プラトンの「国家」五〇七a—五〇九cで善のイデアが太陽の光として語られる時、プラトンは、どこまでも比喩として語っており、アウグスティヌスのように、真理が本来の光であるとは言わない。この二人の間にプロティヌスが在ることが、この相違を説明しよう。Cf. W. Beierwaltes, Plotins Metaphysik des Lichtes, S. 334ff. トマスは精神的な事柄に関して光と言われるのは比喩的 metaphorice にであると言い切る。S. Th., I. q. 67. a. 1.

(36) Augustinus, De genesi ad litteram imperfectus, V. 24. Augustinus, De sermone Domini in monte, II. 13. 46. cf. F. J. Thonnard, la notion de Lumière, dans: Recherches augustiniennes, II, Paris 1962, p. 145–175.

(37) Augustinus, De genesi ad litteram imperfectus, V. 24.

(38) Augustinus, De vera religione, XXXIX. 73.

(39) Augustinus, De trinitate, IX. 6. 9. Cf. Thomas Aquinas, Summa Theologiae, I. q. 87. a.1

(40) Augustinus, De trinitate, IX. 7. 12.

(41) Augustinus, De trinitate, XIV. 15. 21.

(42) Malebranche, Entretiens sur la metaphysique, Préface, p. 14.

(43) R. Jolivet, ibid., p. 173. さらに照明における記憶の役割を強調した好著として Ulrich Wienbruch, Erleuchtete Einsicht, Bonn 1989 (S. 83–114) が挙げられる。

(44) R. Jolivet, ibid., p. 150–164.

(45) アウグスティヌスの〝回心〟における もう一つの重要な発見は、人となった永遠のロゴスとしてのキリストにおいて神探求の具体的な〝道〟を見出したことであるが、この点に

いては別にアウグスティヌスのキリスト論としてまとめられねばならない。

(46) Augustinus, De beata vita, IV. 35. admonitio のもつ重要性を指摘した書として Ragnar Holte, Béatitude et Sagesse, Paris 1962, p. 319. 参照。

(47) Augustinus, De diversis quaestionibus ad Simplicianum, II. 16. 照明説と感覚説の問題については É. Gilson, ibid., p. 125. Rudolf Lorenz, Gnade und Erkenntnis bei Augustinus, Zeitschrift für Kirchengeschichte, 75 (1969), S. 21–78.

(48) Augustinus, De trinitate, XIV. 15. 21.